論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

報　告　番　号	甲　第　1217　号	氏　　名	上野　史香
論 文 審 査 担 当 者	主　　査　　清水　公裕 副　　査　　本田　孝行　・　小泉　知展		

（論文審査の結果の要旨）

間質性肺炎に合併した肺癌の術後症例において術後合併症や死亡のリスクは高いとされている。特発性肺線維症を含めた様々なサブタイプの間質性肺炎において ILD-GAP index が予後予測指標として提唱されている。一方肺癌において PNI 等の慢性炎症を基礎とした予後予測指標が複数提唱されている。本研究では、間質性肺炎に合併した肺癌の術後症例におけるこれらの予後予測指標と死亡リスク・術後の急性増悪の発症・術後の長期酸素療法導入との関連を検討した。

当院呼吸器外科において 2001 年 8 月から 2016 年 9 月の間に肺癌に対して肺切除術が施行された 1,449 例のうち、間質性肺炎の合併を認めた 102 例の診療記録を後方視的に検討した。術前の血液検査・呼吸機能検査・胸部 CT 検査の各結果、ILD-GAP index・PNI 等の各指標、肺癌病期等の臨床的特徴と死亡リスクとの関連を Cox ハザードモデルによって解析した。また術後の急性増悪の発症および術後の長期酸素療法導入との関連をそれぞれ多重ロジスティック回帰分析によって解析した。

その結果、上野は次の結論を得た。

1. ILD-GAP index 0-1 の群と ILD-GAP index ≥4 の群との比較、また ILD-GAP index 2-3 の群と ILD-GAP index ≥4 の群との比較において術後生存期間に有意差が認められ（それぞれ p=0.0001, p=0.0236）、ILD-GAP index 高値は独立して死亡リスクと関連していた（HR 1.32030; p=0.0059）。
2. BMI 高値、血清 CRP 高値は、独立して術後の間質性肺炎の急性増悪の発症と関連していた（それぞれ HR 1.28336; p=0.0206, HR 26.3943; p=0.0165）。
3. 胸部 CT における間質性肺炎の重症度は、独立して長期酸素療法の導入と関連していた（HR 2.78670; p=0.0313）。

これらの結果より、ILD-GAP index は間質性肺炎に合併した肺癌の術後症例において予後予測指標になると考えられ、特に ILD-GAP index 4 以上の症例において高い死亡率が予測された。また術前の BMI および血清 CRP 値は術後の急性増悪を、胸部 CT における間質性肺炎の重症度は術後の長期酸素療法の導入を予測する上で有用と考えられた。

よって、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。